

受講番号 18082 学校名 大栃中学校 氏名 田村 香江

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年生 生徒数 14 名
 科目名 3年生 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course3 (東京書籍)

クラスの様子・特徴

全校生徒40名の小規模校である。対象となる3年生は男子4名、女子10名である。男女共に仲間同士の関わり合いを大切にしながら、積極的に取り組む。特に表現をすることが大変好きで、中でもスキット活動や「話す」活動に興味関心を示す。その一方で「書くこと」に苦手意識を抱えている生徒が多い。

問題の確定

英文を作ることに苦手意識を持っている生徒が多いため「自己表現能力(書く活動)の向上」を目指した手だてが必要である。

予備調査

A 授業の観察

生徒 自己表現(書く)の活動に時間がかかる。次のことが原因であると考えられる。
 語順が分からない。内容においても1つのことを膨らませて書くことができない。言いたいことを既習事項を使って表現することが難しい。
 指導者 他の領域に比べて「書く活動」とする時間が少ない。

B 生徒による授業評価

【アンケートより】
 「あなたが英語を学習するうえで、一番苦手なこと何ですか。」→「文を作ることが苦手」(70%)
 ・単語や文の並びがよく分からない。
 ・文法がごちゃごちゃになる。
 ・何を書いたらいいか分からない。

C 学力データ

CRT(平成17年3月実施)
 【領域別】
 聞く113 話す104 読む102 書く100
 【観点別】
 (表現)A 38% B 23% C 38%
 (言語)A 38% B 31% C 31%

リサーチ・クエスト

まとまりがあり、自分の考えや気持ちなどを読み手に正しく伝えられる英文を書けるようになるにはどのような指導をすればよいか。
 ～6文以上で、主語・動詞を正しく使った自己表現を目指す。～

仮説・実践・検証

仮説1

音読量を増やすことで、英語に慣れ、口で英文を覚えることができれば、そのことが語順の定着につながるだろう。

実践1

【9月～12月】
 学校 教科書の読み物教材を中心として、次の手順で音読練習を行った。「buzz reading → individual reading → shadowing → gesture reading → response reading」(音読回数 計11～15回)
 家庭 5回の音読につき、ページ隅に を1つ描く。4つを目標に取り組ませ、学期末にはこの取り組みを評価対象の一つとした。

検証1

【12月】音読に取り組んだページの単語を並べかえ、意味の通る英文にすることを試みた。音読練習を十分に行った時と、十分ではなかった時では結果に差が現れた。特にslow learnersには有効であったと言える。しかし英文の難易度にも関わるため、「音読活動は語順を感覚的につかむ手段の一つである」と断言するには、引き続き検証が必要である。また家庭で音読練習を行わせる手立てについても考える必要がある。

仮説2

英文を英語の語順の通りに読み、書かれている文章の意味内容を理解する力を養えば、語順の定着につながるだろう。

実践2

【9月～10月】
 段階1 教科書の本文にスラッシュをあらかじめ引いたものをワークシートとして配布し、前から意味をとらえる訓練を行った。
 【10月～12月】
 段階2 本文の内容確認のためのQAを行い、その後「主語 + 動詞」の部分を意識させることにポイント置きながら、ペアでスラッシュを引く箇所について考えさせた。

検証2

【12月】「意味のかたまりの大小」でスラッシュを引く部分が違う為、少し戸惑う生徒がいたが、かたまりとして捉えることは全体的にできていた。生徒アンケートでは、「できるようになった」(11名)「あまり分からない」(1名)「友達と意見が合わずバニクになったこともあった」(1名)という結果である。「語順が分かった」や「前から捉えることで長い文もすっきりしてきた」という声もあった。

仮説3

リレーノートに取り組むことで、書くことに慣れ、また主語・動詞を意識した英文を書くことができるようになるだろう。
 【リレーノートの取り組み手順】
 班(4～5名)ごとにノートを配布する。
 生徒達は自分の能力に応じて英文の数を設定する。
 毎週月曜日にテーマを与え、金曜日に集める。

実践3

【9～12月】なるべく生徒にとって身近なテーマ設定を心がけた。テーマを与える時には必ず指導者が書いた例文を与え、「内容にまとまりがある文」「主語 + 動詞のある文」を書かせることを指導者の目標とした。

検証3

【12月】目標が達成できている生徒は、接続詞や使える英語表現の習得を目指した。また英語が苦手な生徒は、他の生徒の英文や例文を引用しながら英文を作ることを繰り返した。「語順を意識して書けるようになったか」という生徒アンケートでは、1名が「微妙」12名が「はい」という回答であった。またリレーノートからも「主語 + 動詞」が意識できていることが分かった。

研究の成果

今回の研究目的の「主語 + 動詞」を使って英文を書けるという点においては達成できたと思う。特にリレーノートの取り組みは有効であった。ドリル的な表現活動ではなく、生徒自身が身近なテーマに楽しみながら取り組んでいた。取り組む前は、思いつくままに単語を並べることで言いたいことを伝えようとするために読み手には伝わりにくい文章になっていた。特に「主語」がない英文が多かった。しかし「誰がどうする」ということを意識して読むことと書くことを平行して指導していくことで語順の定着が図れ、漠然としていた英語の文構造をはっきりさせることができてきた。

今後の授業改善の課題

音読活動では、家庭で音読量を増やすことを十分に指導できなかった。リレーノートでは、「現在形の使用」と「一人称の英文の使用」に関わるテーマ設定が多かった。今後「様々な時制の使用」「三人称の英文の使用」につながる設定を心がけ、「主語 + 動詞」を正しく使えるよう指導をしていきたい。4技能において英語の文構造を意識することは大切であるとする。研究が「点」から「線」でつながれるよう取り組んでいきたい。